山梨新報「直言」原稿

二〇〇八年八月十五日

「理想」から「リストカット」まで

山梨大学名誉教授・前山梨大学副学長　伊藤　洋

江戸時代中期の医者で農本主義思想家安藤昌益（１７０３－６２）は次のような言葉を書き残している。

「各々耕して子を育て、壮んに能く耕して親を養ひ子を育て、一人之を為れば万々人之を為して、貪り取る者無ければ貪り取らるる者も無く（中略）是れ自然の世の有様なり」（『自然真営道』）

それほど難しい文章ではないが、念のために意訳しておこう。

「すべて人々は大地を耕しながら子供を育てる。やがて、育った子供たちがまた一所懸命に働いて親を養い子を育てる。皆がこういうことをしながら、人から奪い取る者も、取られる者も無い（中略）これが『自然の世』の摂理なのだ」

安藤昌益の生きた時代はいざ知らず、今この国に起こっている陰惨で悲惨な事態は、この文章がいかに絵空事であるかを証して余りある。

農では食えない農民は耕作を放棄し、漁民は資源の枯渇と燃料の高騰で出漁すらままならない。苦労して育てた子供たちは、食えない農漁村をあきらめてとっくに都会に出たものの、忙しさにかまけてロクな子弟教育もできなかったか、彼らの子供の多くがフリーターだの非正規雇用だのと定職を持たない。揚げ句の果てに「誰でもよかった」とうそぶいて凶悪犯罪に身を落とす。

世は、昌益の言う『自然の世』とは大違いの格差社会。福沢諭吉の言にも違背して「人の上に人を作り、人の下に人を作る」。

人の世の道ならぬ道を尋ねてみれば、妻帯の裁判官が若い婦人にうつつを抜かしてストーカーに励み、博士の学位審査に謝礼をもらうのを当然と心得ていた医科大学教授の一団、その監督官庁の官僚は汚職にまみれて捕縛され、政治家は次の選挙以外に何の経綸も語らない。加えて学校の先生までがその免許と分限を商品券に依って買って始末。

その地位を貪り取って人の上に這い上がっておきながら、指導者層がこ

のザマであってみれば、庶民はみなこれを範とする。かくて老舗割烹の食品偽装からはじまって耐震偽装まで、社会の隅々に嘘が充満する。

哲学者で思想家の見田宗介は、「現実」という言葉の反意語が、戦後から大きく3回変化してきたと言う（見田宗介『現代日本の感覚と思想』（講談社学術文庫））。反意語とは、「暑い」に対して「寒い」というように同一言語の中で、意味が正反対の関係にある語のこと。見田によれば、敗戦直後から60年安保騒動頃までは「現実」の反意語は「理想」であった。食うや食わずの過酷な「現実」は、山のあなたにあるかも知れない「理想」郷としか対比されなかったのである。

次いで石油危機に象徴される経済成長終焉期になると「理想」が「夢」に取って代わられ、さらにバブル経済期から95年ごろには「現実」の反意語は「虚構」と考えられるようになっていると説いたのである。

これを引き継いで大澤真幸は、90年代から現在は、「超現実」が「現実」の反意語となっているのではないかと言う（『不可能性の時代』（岩波新書））。大澤の言う「超現実」とは、自分の立ち位置を見失った人々、分けてもも若者達がリストカットや刺青、麻薬や茶髪と言った「現実」的に無意味な「事実」を体験しないと「現実」そのものが感得できなくなっている事態のことだという。そういえば、ネット依存症の若者達は、バーチャルな世界を「現実」世界と見紛っている。

「親が書いた作文で賞を取り、親が描いた絵で賞を取り、無理やり勉強させられたから勉強は完璧」、「県内トップの進学校に入ってあとはずっとビリ、高校出てから八年、負けっ放しの人生」。

秋葉原で無差別殺傷事件を起こした犯人は、誰にも読んでくれないブログにこう空しく綴っていた。彼の両親は、学歴さえつければ子供が幸福になれると「夢」を見たのだろう。だが、ただの「虚構」に過ぎなかったことが明らかとなった。

昌益の言う「自然の世」ならずとも、苦しい「現実」の中にあってもなお、子供を産み育てるなどということは誰にでもできたこと。それがこんなに難しいこととなったのは、「現実」の反意語を的確に認識できないほど混迷した現代人の悲劇から来たものではないか。「超現実」の向こうに未来が見えない以上、盆に帰ってきた先祖達に、「現実」の反意語を再度「理想」に返す誓いを立てる時が来たのかも知れない。